勇者と魔王SS～活動報告小話集２～

ゆずはらしの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
勇者と魔王ＳＳ～活動報告小話集２～

【Ｎコード】
Ｎ１０４４ＢＡ

【作者名】
ゆずはらしの

【あらすじ】
２０１２年度、新年の福袋的小話集。活動報告と、ブログ、アトリエゆずはらでちょこちょこ書いていたＳＳ。
基本的におバカさんな話。
警告タグの「残酷な描写あり」が一瞬、「残念な描写あり」に見えた。それだったら堂々とつけるんだけどな。

＊　＊　＊

ごく普通の女子高生、神山透子はある日、異世界に勇者として召喚される……魔王を倒せと、荒野に放り出されるのだが。

唐突に。

目の前には、超絶美形。
漆黒の髪に深紅の瞳、着る人を選ぶだろうデコラティブな衣装をあっさりと着こなし、気品すら漂わせている。うわ、足長っ。腰の位置、高っ。

ごてごて飾りがついたマントをひるがえし、かつん、かつん、とブーツの音を響かせながら、階段を降りてくる。なんの番組。なんの映画。似合いすぎだろう。決まりすぎてて厭味っぽいぞ。
ちょっとアレだけどね。頭にねじくれた角あるけどね。背中に真っ黒な羽あるけどね。触ったら痛そうな、爪が長く伸びてるけどね！

あたしの目の前まで来ると、超絶美形はにこりともせずにこちらを睥睨（へいげい）し、言った。

「そなたがこたび、召喚されし勇者か……よくぞ、この城までたどりついた」
「他力本願な王様始め、この世界の住人には、えらいメーワクしたわ」

伝説の聖剣とやらを構えながら、あたしは言った。

「フツーの女子高生呼び出して、世界の為に働けって、何なわけ？
何様？　この世界の事は、この世界の人間がどうにかするものでしょうが！

こんななまくら一本で、右も左もわからない人間を城からほうり出すって、やる気ないにも程があるでしょ～！
国民死なせたらバッシングあるから、異世界から勇者呼び出して戦わせてるって、思い切り言いやがったわよ、あのクサレ王！」

それなりに美形だったが、やる気のなさが丸わかりの祝福をおざなりにされ、城から追い出された。予算もないとかで、持たされたものは、この聖剣の他には、服が一式と三日分の食糧だけ。
おかげで魔王城のある荒野にたどり着くまで、アルバイトをしながら食いつなぐしかなかった。

「皿洗いと踊り子が本業になりかけたわよ、おかげで！」

バレエを習っていて良かった。

「その境遇には同情するが……、ここまで来たという事は、吾と戦う意思ありと見て良いか」
「ああ、まあ、あんたには恨みはないけどね！　変な首輪つけられちゃってさ、あんたと戦って倒さないと、あたしが死ぬらしいのよ」

あたしは自分の首を示した。クサレ王と腹黒神官があたしにつけた、黒い首輪がそこにあった。

魔王を倒すか、あたしが死ぬかしないと外れない。そして、一年の期限が過ぎると、自動的にあたしの首を絞めて命を奪う。

こんな、もろに呪いのアイテムで枷をつけないと安心できないなんて、どれだけ他の勇者に反逆されてきたんだ。その勇者たちの気持ちわかるけど！

「死にたくないから、ここまで来たわ」

逃げ出す事すらできないから。

魔王は、あたしを見つめ、ふうと息をついた。

「まこと、愚かしい行いを繰り返すな、人の国の王とその取り巻きは。

哀れとは思うが、勇者よ。吾も殺されてやるわけにはゆかぬ」

「そうだろうね。あたしもこんな理由で殺しに来る人がいたら、全力で嫌がるし。でも、死にたくないからさ」

剣を構える。

「だから付き合ってよ、悪いけど。

礼儀らしいから、名乗るわね。あたしは透子（とおこ）。神山透子（かみやまとおこ）。食べ歩きが好きな、ただの女子高生……だった」

「トオコ」

魔王は、不思議な発音だと言いたげに、あたしの名前を繰り返し

た。

「礼にのっとり、吾も名乗ろう。
北の荒野、魔の一族を統べる王、
タラチ・イアンデス・グロウガリアス」

時が止まった。

「……は？」
「タラチ・イアンデス・グロウガリアス」

もう一度、律儀に名乗ってくれた。なんかいい人だな魔王！　いやそれより。

「……タラちゃんです？」

玲瓏たる声音と、麗しい発音で名乗られたその名は、
一般庶民で、この世界の言語の発音に慣れていないあたしの耳には、某国民的アニメの登場人物の名前にしか聞こえなかった。

こんなに美形なのに、タラちゃん！

魔王さまなのに、タラちゃん！

はとこの名前はイクラちゃんで、猫の名前はタマですか！　そうしてお魚くわえたドラ猫を、追いかけたりするんですか～っ！！！

「えっと、あ～……」

脳裏に走馬灯のように走る、元の世界のアニメの映像と主題歌。霧散しかけた気力をなんとかかき集め、あたしは剣を構え直すと、魔王に言った。

「お母さんの名前は、サザエですか！」

……でも、やっぱり混乱していたらしい。

＊　＊　＊

ピンポイントでギャグが書きたくなって、書いてみました。

とりあえずこのあと、魔王さまは首輪を外してくれ、元の世界に帰る方法を探してくれます。

２０１１年１１月２７日　活動報告&アトリエゆずはら記事より

続きました。

ひよひよ、と、小鳥の声がした。

うららかな昼下がり。

柔らかな芝生の上に、分厚いキルトの布を敷き、あたしは絶賛、ピクニック中だった。

「うをを～、このチキン絶品！　ハニーマスタードがきいてる～。こっちのサンドイッチも！　チーズとバジルのハーモニーが、まったりとして、しかししつこくなくっ」

「ミルクティーもあるぞ」

隣にいる魔王が、熱いお茶を注いでくれた。

「っく～っ、五臓六腑（ごぞうろっぷ）にしみ渡る……っ」

「それはどういう表現だ」

「端的に言うなら、うみゃい！」

「そうか。料理番に伝えておく。喜ぶだろう」

あたたかな日の光。おだやかな風。鳥の声。花の香り。

お茶を入れてくれる迫力美形。

そして、……美味しいごはん！

「やー、もう、幸せいっぱいですよ、タラちゃん」

「タラチ・イアンデスだ」
頭にねじれた角、背中に羽つきの迫力美形が言った。ティーポット片手に持ちながら。

「日本人の耳には『タラちゃんです』と聞こえるんですよ、タラちゃん。
ちなみに『ちゃん』は親愛を意味する呼び掛けのようなものです」
「トオコは吾に、親愛を覚えているのか？　吾は、人族の者が忌避する魔族の王ぞ？」
「あのクサレ王と腹黒神官に比べれば、天使のようです！　ごはん美味しいし、首輪はずしてくれたし」

あたしはそう言うと、ミルクティーをもう一口飲んだ。

「正直言って、この世界とは何の関係もないんですよ、あたし。なのにいきなり呼び出されて、勝手に首輪つけられて。
戦って魔王倒して来い、さもないと殺すなんて言われて、この世界の人間に義理とか信頼とか、もてるわけないでしょう」
「吾には持てるのか？」
「魔王陛下はあたしの命を救ってくれた。美味しいごはんもくれた。それに何より、」

あたしはぐっ、と拳を握った。

「タラちゃんなんて名前の人に、害意を持つのは難しいんですよ！
一般庶民な日本人としては！」

某イソノさん家のホームドラマ、おそるべし。子ども心にすりこまれた、「は～い」や、「ちゃ～ん」の一言や笑顔が、どうしても、どうしても、ど、う、し、て、も！
魔王さま見ると、くっきりと脳裏にフィードバック。だって、タラちゃんだし！

魔王なタラちゃんは、良くわからないという顔をした。

「良くわからぬが……、まあ。しばらくは、ここでのんびりするが良い。勇者一人ぐらい、養っても問題はないゆえな」
「ありがとうございます。あ、でも、役に立てそうなことあったら言って。無駄飯喰らいはイヤだから。荒事以外でなら協力するし」
「心配するな。ごく普通のジョシコオセイとやらのそなたに、荒事なぞ頼んだりはせぬ。
異世界人のそなたでもできそうな仕事なら、何かしら、あるだろう。執事のオルテスに頼んでおく」
「あざーっす！」
「それはどういう意味だ」
「ありがとうございます、の略」
「そうか。あざーっす？」
「いや、タラちゃん、そんな真面目な顔して言わないで。軽いノリで言う言葉だから」
「ふむ？」

首をかしげて、魔王陛下は、あざーっす、とか、あざっす、とか、口の中でつぶやいている。迫力美形に言われると、ギャップがありすぎる。

「それにしても、本当なの？　お母さんの名前」
「む？　ああ。驚いたぞ、トオコに問われた時は」
「いや、まさかと思ったんだけど……」
「異界の勇者には、予知や透視などの能力があるのか？」
「や、あたしにはないです、そんな力。もしあるとすれば、原作者の……ええっと。長谷川町子先生にじゃないですかね」
「ハセー・ガウ・アマーチカ？　預言者か何かなのか」
「預言者というか……、あたしの住んでた日本という国で、多くの国民に多大な影響を及ぼした、マンガ家という職業の人です。もう亡くなってますが、いまだに彼女の書いたものは読み継がれ、語り継がれています」
「そうか。芸術家は、預言者と似たところがある。偉大な人物だったのだな。
吾のみならず、母の名すら看破していたとは」
「初めて聞いた時は、冗談かと思ったよ……」

魔王タラチ・イアンデス・グロウガリアス。
日本人の耳には「タラちゃんです」と聞こえる名前を持つ母親の名は。

「サザエさんなんだもんなあ……」

迫力美形な魔王のお母さまは、迫力美人なきらきらしい女性だった。その女性に笑顔で、『サザエです』と名乗られた衝撃は、いまだ新しい。

「サジャー・エイデス・グロウガリアスだ」
「うん、やっぱ『サザエです』としか聞こえないわ」

長谷川町子は、偉大だった。

＊　＊　＊

アトリエゆずはらの、拍手お礼として置いていたもの。なんだか続いてしまった。

意外でした。前編。

「ある意味、必然であると言えようのう」

迫力美女が言った。堂々たる体躯の肉食系美人である。流れ落ちる漆黒の巻き毛。真紅の瞳。象牙色をした頭の角が、つややかにセクシー。いや。

「必然？」
「うむ。まあ、説明すると長くなるのだが」

大きな窓から差し込む光が、部屋中にゆったりと、陰影をつけている。
美しい調度品が、上品に配置されたサンルーム。
白と金でできたティーテーブルには、可愛らしいお菓子を盛った器と、ティーセット。
そうしてデコラティブでありながら、繊細かつ優美な椅子に腰かける、頭に角のある迫力美人。
現魔王の母君であらせられる、グロウガリアスの魔将。麗しき魔剣の女王。

「何が必然なんですか、サザエさん」
「サジャー・エイデスじゃ」
「サザエです、としか聞こえません……」
「まあ、人族の耳には、魔族の発音は難しかろうしのう」

鷹揚に笑いつつ、サザエさんは、目の前の椅子を示した。

「まずは、座れ」
「いえ、あたしは使用人ですので」
「わらわが構わぬと言うておる。座れ」

迫力美人なサザエさんに言われ、あたしはスカートのフリルを気にしながら、優美な曲線を描く椅子に腰かけた。

タラちゃんの口利きで、あたしは現在、メイドをしている。大変な事も多いけど、でも、それなりに充実している。平穏な日々があるのって、ありがたい。たまにちょっと、元の世界の事を思い出して悲しくはなる。でも、忙しく働いていれば、気もまぎれる。
それに……うれしいこともあった。お仕着せなんだけど、デザインが可愛いんだ、魔王城のメイド服！　渡された時にはきゃーきゃー言って喜んじゃった。

ただ、たまにこうして、魔王さまや母君さまに、話し相手になれと言われるのが。ちょっと、気まずいと言うか。

と、思っていたら、合図をしたサザエさんに、ささっと近寄る先輩メイドさん。そして素早く用意された、もう一脚のティーカップに注がれる紅茶。

ことりと目の前にカップを置かれ、あたしは青ざめた。

「そなたも飲むが良い」
「いえ、あたしは」
「飲め。一人で茶をたしなんでも、楽しくもなんともない」

サザエさんは微笑みながら、しかし逆らえない何かをかもしだしつつ、あたしに言った。うん。逆らえない。逆らったら何か、次元の彼方に飛ばされてしまいそうな気がする。

手にしたティーカップにしかし、あたしの緊張は倍増。

「なんじゃ。ミルクティーは嫌いかえ？」
「いえ、好きです。好きなんですが、ちょっと緊張してしまいまして」
「かわゆい事を言いおるのう」

ほほほほほ、とサザエさんが優雅に笑う。あたしも強ばった笑顔になった。いや、ミルクティーは大好きだよ！　でも、怖いんだって、このティーカップ！　持ってるのが！

手にしたカップに視線を落とす。優雅な金色の持ち手がついた、藍色のカップ。

カップの形に削り出し、中をくり抜き、唇を当てる部分に違和感がないよう、磨き抜いた青金石（ラピスラズリ）。

落としたら、それまで。薄く削った宝玉のカップは、ぱんっと砕

けてしまうだろう。それほど繊細、そして匠の技を尽くした芸術品が、あっさりとあたしの手の中に。

多いんだ、そういうの、魔王城。こないだも、ガラスだと思っていたら、水晶をくりぬいて造られたグラスでしたよ。それが何ダースも並んでましたよ、キッチンの棚！　お皿やボウルでも同じバージョンがありましたね！　紅水晶を削って形を整えたお皿がとか、紫水晶のボウルとかね！　あの大きさのもの作るのに、どんだけの水晶の塊が必要だったんだ。磨けって言われたけど、手が震えましたよ、落としたらどうしようって思って！

そういうグラスやカップ、お皿やボウルで、飲み食いできる神経がわかりません、サザエさん……。

「人の王の愚劣な行いは、代々続いておるでなあ。そなたのような異世界の人間を誘拐しては、剣を持たせ、われらの領土に放り出す。かような間に合せのような勇者に倒されるわれらではないが、犯罪の片棒をかつがされるようでな。良い気分ではない」

恐る恐る、涙目になりつつ一口、ごくり。そうしていると、サザエさんが言った。

眉をひそめた顔でさえ美人。

「え、あ、間に合わせ、ですか？」

「で、あろう？　本気でわれらをどうにかしたいのであれば、自国の魔力ある優秀な若者を鍛え、軍を作ったほうがまだ、可能性はある。だというに、剣を持つ術すら知らぬような異世界の人間をさら

ってきては、死にたくなくば戦って来いと……」

ああ。そうだよね。言われてみれば、間に合わせだよね。あたしも、武器なんて持ったことのない人間だったし。

「自分の国の民を使うと、王の評判が悪くなるから、異世界の人間を呼んでいる、と言われました……」

それに、そんな事も言っていた。考えてみれば、あたしはあの王と神官にとって、使い捨ての道具だったんだ。

胸が痛む。そんな理由であたしは、この世界に呼び出され。

向こうの世界を、向こうの世界であたしが持っていた、大切なもの全てを奪われた。

「トオコも災難であったな」

「いえ……あたしは。幸運でした。タラちゃんに、首輪はずしてもらったし。今もここで、働かせてもらってるし」

それでも、自分が幸運であったことはわかる。あのまま殺されても、おかしくはなかった。でも、生かされた。助けてもらった。

殺せと命じられた魔族の王に。

「トオコは、けなげよの」

サザエさんが、ふと微笑んだ。うわう。綺麗。綺麗。美人！

「いいいいえ。けなげとかそんなんじゃ……、あう、えと、必然というのは、それで？」

あまりの美しさに目がくらみそうになりつつ言うと、サザエさんは、「そうであったな」と言ってうなずいた。

意外でした。前編。（後書き）

ラピスラズリや水晶くり抜きのカップやグラスは、実物を見たことがあります。
ロマノフ王朝か何かの美術展で、展示されていました。
本水晶の光り方って、ガラスとでは違うんですね……それが無造作に、カットグラスの形でずらっと並んでいるのを見て、庶民なわたしは気分が悪くなりました。あれでお茶とか飲むって心臓に悪いよ……。

意外でした。中編。

「そなた、われらの名に親しみを覚えたであろう？」

サザエさんが言った。あたしは、ほえ？　と妙な声を上げた。

「なんじゃ。息子に言うたのであろう？　わらわと息子の名に対しては、敵対する思いを抱けない、親しみを覚えると」

「あ～。まあ。言った……ね」

あれか。あのピクニックの時の発言か。

だって、タラちゃんと、サザエさんだもんなあ。

「ハッセ・ガウー・アマールチカは、偉大な人物であったようじゃな」

「長谷川町子先生です」

異世界発音されると、どこの人ですか、な感じだね。

「『いじわるばあさん』と、『サザエさん』が代表作で……」

「おお。それか。わらわの名に似ておるのう。サジャー・エッシャン」

「や、『サザエさん』……え～、日本語で、自己紹介の時に、『で

す』とか、『でございます』とかいう言葉をつけてですね」

あのアニメ、確か、サザエでございます、って言ってなかったっけ。

「『サザエでございます』」

と、思ったら、優雅な笑みを浮かべた美女に言われた。……何！？

「うむ、必然じゃな」
「え、いや、いまの何ですか、サザエさん！」
「わらわの名を名乗っただけじゃ」

はい？

「え、確か、『サザエです』……」
「通り名はな。幼名も入れると、わらわの名は、
サジャー・エイデ・ゴウシャ・ザイ・マルスと言う」
「……」

すみません。
庶民な異世界人の耳には、『サザエでございます』としか、聞こ

えません。

「長いので、普段はサジャー・エイデスと名乗っておるが」

正式名が『サザエでございます』で、短くしたのが『サザエです』。

うん。丁寧語だっけ？　それが普通の言い方になってるよ。

「あああの。それじゃ、タラちゃんにも別な名前が？」

「あれは、タラチ・イアンデスのままじゃ」

「さようですか……」

なんとなく、ほっとした。いや、別な名前があっても良いんだけどね！？

「ええっと、それで……何の話でしたっけ」

「必然の話じゃ」

いかん。『サザエでございます』の衝撃が激しくて、忘れる所だった。

「あ、はい。必然？」

「人の王の悪辣（あくらつ）さにな、われらも辟易（へきえき）したのじゃ」

ラピスラズリのティーカップを持ち上げ、優雅にサザエさんは、ミルクティーをすすった。

「したがのう。異世界からの客人は、われらの姿を見ただけで恐慌状態になる者もいてのう」
「あ、えーと……すみません」

確かに、角や翼のある姿は、予備知識なしに地球の人間が見たら……現代日本ではそれほどでもないけれど。時代によっては、恐怖にかられる人もいただろう。
魔族の人たちが悪いわけでもないのに。

「なぜ、トオコが謝るのじゃ」
「いえ、何だか……すみません」
「おかしな娘じゃのう」

ほほほ、とサザエさんは笑った。

「見慣れぬ姿の者を見れば、怯えるのは生き物の常ぞ。仕方がないわな。
したが、こちらの話も聞かず、武器を振り回し続けられてはのう。こちらも困るのじゃ。
戦いたくも、傷つけたくもないのに、怪我をさせざるを得なくて

な。こちらも最初は事情もわからず。起こらずとも良い悲劇が起きたりもしたわ」
「ああ……はい」

あたしはちょっと神妙な顔になった。あたしは幸運だった。でも。間に合わずに命を落とした、異世界人もいたのかもしれない。

「まあ、それでな。われらも考えたのよ」

サザエさんは言った。

「人族の王の悪行は止まらぬ。誘拐され、死地に赴かされる異世界人は、今後もいるであろう。
ならば、異界人にとって馴染み深い、親しみを覚えるような名を、名乗ってみてはどうかと」

……。

「はあ！？」
「うむ。じゃからな。われらは、魔王の眷属や、魔王となるのが確実な子どもには、異世界風の発音の名をつけるのよ。慎重に、占ってからな。
そなたの言う、ハッセ・ガウー・アマールチカは、力のある芸術家であったようじゃな。わらわたちの世界の占者にも、その力が見

えたのじゃから」
「はあ！！？」
「ゆえに、わらわは『サザエでございます（サジャー・エイデ・ゴウシャ・ザイ・マルス）』と名付けられ、息子には『タラちゃんです（タラチ・イアンデス）』という名が贈られた」
「はああ！？」

あたし、唖然。開いた口がふさがらない。

「え、いや、ちょ、そしたら、魔王さま、え、代々、占って、そんで『タラちゃんです』とか言う名前……え、まさか！　そしたら、『イクラちゃん』って名前の人もいるんですかっ！」

思わず食いついた。

「イクール・アルチ・イアンデスは、わらわの従姉弟の息子じゃ」
「おお！　タラちゃんのはとこがイクラちゃん！」

素晴らしい。

「じゃ、ワカメちゃんとか、カツオくんとか！」
「ワールカ・メイチー・イアンデスは、妹じゃ。カイチ・ウー・ウォークンは、弟になる」

なに、そのシンクロ率。

「じゃ、じゃ、フネさんとか、波平さんとか、いますか！」
「フニーエ・スァンデスはわらわの母。ナムール・イーフ・エイデスは、」
「お父さんですか！」
「いや、叔父じゃ」

ニアピン。
ちょっと残念。

「うわー、でもすごいシンクロ率……」

どうしよう。変なふうにテンション上がった。

「あ、そしたらマスオさんは？」
「その名前の者は、おらぬのう」
「そうですか……」

気の毒に、マスオさん。いや、別に気の毒でもなんでもないんだけど！

「こっちでも影が薄いのか、マスオさん。あの話でも婿養子状態だったし……ん？

あれ、そしたら、こっちの占い師さんが優秀だってことで、長谷川町子先生が預言者とか何とか言うことにはならないのじゃ？」

意外でした。後編。

あたしの言葉にサザエさんは、首をかしげた。

「なぜ、そうなるのじゃ？」

「え、だって。こっちの魔族の人が占って、あたしの世界の、良く知られたマンガの登場人物の名前を、その、見つけてくるんだったら……」

「トオコ。物事は響き合い、連動するものぞ？」

サザエさんは、つややかな黒髪を優雅にかきあげた。

「世界と世界は、互いに映し合い、つながりあうものぞ」

「はあ」

「ゆえに、われらが占って見つけた名は、そなたの世界においても預言の元にある名である」

あたしは、首をかしげた。

「よくわかりませんけど……」

「力は力を呼ぶ」

サザエさんは言った。

「わからぬか？　そなたの知るハッセ・ガウー・アマールチカが偉大な人物であったからこそ、
われらの世界にその力が響いたのじゃ。
その響きを、占い師は見つけ、引き込んだ。
ゆえに、ハッセ・ガウー・アマールチカは、預言したとも言えるのじゃ。意識せず、それでいて確実に、二つの世界をつなげたのじゃからのう。おのが作品によって」
「え、……ええ～？？？？」
「わからぬか。したが、そういうものじゃ」

くくっと笑ってサザエさんは、ミルクティーを一口飲んだ。

「魔法の法則は、あたしにはさっぱりです……」
「力は力を呼ぶだけじゃ。単純じゃぞ？」
「う、うう～ん？」

全然わからん。

「ええっと……とにかく！　異世界の言葉を、代々の魔王さまは名前にしてるんですね？」
「そうじゃ。それで、まあ、悲劇はかなり減った」

サザエさんの言葉に、あたしは納得した。そりゃそうだ。『サザエでございます』とか、『イクラちゃんです』なんて名乗られたら、

思わず止まる。思考とかやる気とか、いろいろ。

「そう言えば、あたしの他にも勇者っていたんですか？」
「何人か会うておるぞ。どうも、そなたと同じ世界とは限らぬようじゃが」
「そうなんですか？」
「うむ。わらわや、妹たちの名に反応せぬ者もおったのでな。そなたの前に来た勇者は、おそらく同じ世界の者であろうが」
「あたしの前の勇者……」
「三十年ほど前になるか。若い男でな。相手をしたのは、わらわだったのじゃが……、名乗った瞬間、泣き崩れられた」
「は？」
「『こんな美女が、サザエさんだなんて……！』と言われてのう。魚をくわえた猫がどうのと言っておったが」
「あ～……それ、たぶん、あたしと同じ国の人ですね……」

衝撃の度合いがわかる。脳裏に流れたであろうテーマソングも、あたしと一緒だっただろう。

「あれ、でも三十年？　そんな前からあのアニメあったっけ？」
「あちらとこちらでは、時の流れが違っておるようじゃぞ。勇者たちの話をまとめれば」
「あ、そうなんですか？　あや～……そういう設定の話あるな、言われてみれば」

むこうの世界で読んだ、異世界トリップもののラノベを思い出し

つつ、あたしはうなずいた。

「まさかの同級生だったり？　いや、それはないか。いきなり行方不明になった同級生とか、いなかったよね……むしろ、あたしが行方不明者……」

あ、ちょっと落ち込んだ。

「いや、しっかりしろ、あたし。ええとサザエさん。それで、その勇者はどうなったんでしょうか」
「会いたければ呼び寄せるぞ」
「呼び寄せ……え、まだこっちで生きてるんですか！？」
「うむ。

わらわの夫じゃ」

……はい？

「シュウ・ゴー・ハマー・ノウ・レク・サージャ。いろいろあっての、わらわの夫におさまった」

にっこりと、サザエさんが微笑んだ。

「え、しゅうご……修吾さんかな。ハマー・ノウ……浜野？　夫……え、じゃ、タラちゃんのお父さん？」
「うむ。わが城に住み込んで、あれやこれやと働いておる。ああ、『レク』というのは、婿という意味じゃ。レク・サージャで、わらわの婿、ということじゃな。
シュウゴにはこちらに身寄りがなかったゆえ、わらわが娶る形になっての」
「は、じゃあ、えと、いわゆる入り婿……ってことは」

あたしは思わずつぶやいた。

「リアルマスオさん」

会いました。

「……と、言うわけで、俺が浜野修吾（はまのしゅうご）です。前魔王陛下であるサザエですさんの、夫をやらせていただいています」

三十過ぎに見える、純日本人な顔立ちの男の人が、会釈して言った。あたしは軽く頭を下げた。

「神山透子（かみやまとおこ）です。えっと、浜野さん、あたしと同じ日本人……」
「そうだよ。透子ちゃん……そう呼んで良い？　透子ちゃんも、衝撃受けたでしょ、魔王の名乗り聞いて」
「ええ、まあ。……『タラちゃんです』って言われたし」
「俺は、『サザエでございます』だった」

二人して、遠いまなざしになった。

「長谷川町子ってすごいよね」
「そだね。……おれ、タラチが生まれた時にさ。もっとカッコイイ名前にしたかったんだけどさ」

あ。やっぱり、タラちゃんのお父さんなんだ。

「サザエに晴れやかな顔で、『この子の名前はタラちゃんです！』

って言われた時には、泣けば良いのか笑えば良いのかって気分になったよ。わかってるんだけどね？　次に呼ばれる勇者のためだって。わかってはいるんだけどね？
でも自分の息子に『タラちゃん』って……！」

こっそり泣きました、と浜野さんは言った。気持ちはわかる。

「えっと、でも、魔王って代々、イソノさん一家の名前になるの？
この先も？」
「この先はどうかわからないけど……俺の前の勇者のときは、魔王の名前はイソノ家の名前じゃなかったよ」
「へえ？」
「その時は確か、アイムー・ミク・イーマ・ウーシュと、アイムー・ミヌー・イーマ・ウーシュっていう、双子の魔王だった」
「ん～？」

あたしは首をかしげた。何のアニメだろう。その名前のキャラクターが思いつかない。

「えと、アイムー……？　」
「知ってると思うよ、透子ちゃんも。
ちなみに、その時の勇者は、魔王の名乗りを聞いたとたん、笑いの発作に取りつかれて、どうにもならなくなったらしい。最終的に、『子どものころの友人であるミッキーとミニーに剣を向けるなど、俺にはできない！』と言って、戦闘はチャラになった」

ミッキーとミニー？

「I'm Mickey Mouse（アイムー・ミク・イーマ・ウーシュ）と、I'm Minnie Mouse（アイムー・ミヌー・イーマ・ウーシュ）」

浜野さんが発音してくれた。ああ。

「世界的に有名な、例のネズミたちですか……」

英語圏の人だったらしい。

「召喚される勇者の国に合わせて、アニメのキャラの名前、引っ張り出してるんですか。マジパネェ、魔族の占い師」

そうして、「俺はミッキーマウスだ！」「あたしはミニーマウスよ！」と名乗られた、英語圏の勇者の衝撃も、半端なかっただろう。笑いの発作か。うん、そうだろうね……。

「えーとでも、浜野さん、若いね？　三十年こっちにいるって聞いたけど」

話題を変えると、浜野さんは、ああ、という顔をした。

「あ、それね。ちょっと裏ワザって言うか。俺、今、五十は越えてるんだ」

え。

「来た時、二十六だったから。でも、サザエと一緒になってから、何か起きたみたいで。老化がゆっくりになった」

「へえ～……」

「まあ、でも、ありがたいよ。魔族は長命だし。タラチが成人するまで、生きていたかったからね」

「ああ。……良かったですね。タラちゃんも立派な魔王になったし」

そう言うと、浜野さんは、照れたような、誇らしいような顔をした。あ、お父さんの顔だ。

「親の欲目じゃないけど、タラチはがんばってるよね」

「あ、はい。カッコイイです。貫禄あるし。お城の人たちからも、慕われています。評判良いですよ」

「あ、そう？　ふふふ。だって、サザエと俺の子どもだもんね」

「デレデレな顔になってますよ、浜野さん」

ふふふ、とあたしが笑うと、浜野さんは赤くなって、でも嬉しそうな顔をした。

「いや、ほんとにね。タラチは、体が弱くて。熱ばっかりだす子だったんだよ。それが、大きくなって……感慨深いと言うか」
「タラちゃん、体弱かったんだ……」
「うん。サザエの魔力が強いのに、俺はそうでもなかったから……子どもに影響出たみたいで。でも、ここまで大きくなったんだから、もう大丈夫だよね。
後は、成人するだけだし」

……え？

「浜野さん、今、なんて言いました？」
「ん？　サザエの魔力が強いのに、、俺はそうじゃない……」
「いや、その後」
「子どもに影響出たみたい？」
「もうちょっと」
「大きくなったから、もう大丈夫……あとは成人するだけ？」

きょとんとした顔の浜野さんに向かって、あたしは叫んだ。

「タラちゃんて、成人してないんですか！？」
「まだだよ。だって、あの子、十五歳だから」

なんですと！？

「まさかの年下〜っ！！！！？」

衝撃の事実。

魔王さまなタラちゃんは、年下の男の子でした。

集まりました。

目の前には、きらきらしい美形たち。

青く輝く髪と、氷にも似た薄青の瞳、白く輝く角と翼も神々しい男性。彼の名は、

「波平さん」

「会えてうれしいぞ、トオコ」

優雅な微笑も神々しい。なのに波平さん。彼の名前は、波平さん！

「ほんに。こたびの勇者はかわゆらしいのう」

「フネさん……」

真紅の髪と瞳の、燃え上がらんばかりに情熱的、官能的な美女が言った。漆黒の角がセクシーです、お姉さま。動くたびに、お胸が揺れてます。フネさんなのに。フネさんなのに！

「タラチは、良い娘に出会ったよね」

涼やかな声音で言う、金髪碧眼の美青年。金色の角と翼がまばゆい。音楽とか聞こえてきそう。ハレルヤ～とか歌いたくなりそう。

「イクラちゃん……」

そんな彼の名前は、イクラちゃん。
あたしは、思わず天を仰いだ。

「どうした、トオコ」

その中でも、美形ぶりではひけを取らない、赤い瞳の漆黒の魔王さまがこちらを見る。なんかもう、無駄にキラキラしてませんか。

「なんでもないです、タラちゃん。ちょっと、無性に、いろんな所にゴメンナサイと言いたい衝動にかられただけです」

涙をこらえつつあたしが言うと、タラちゃんは「ふむ？」と言って首をかしげた。

「父上と同じようなことを言うな。異世界の勇者とは、みな突然に天を仰いだり、打ちのめされたような顔で、夕日に向かって走ったりするものなのか」
「異世界には異世界の事情が……って、浜野さん、そんなことやってたんですか」
「『サザエさんのお母さんが、フネさんだなんて～！』と、叫びな

がら」

ああ。いろいろ、いろいろ、ギャップを感じたんだろうな。フネさんの揺れる胸を見つめつつ、あたしはそう思った。

「異世界の勇者とは、良くわからないものだな」

教官！　と言いたくなるような、クールな美女が言った。青みがかった銀髪に深い青の瞳、白銀の角と翼の、

「ワカメちゃん」
「俺もいるぞ～」

ワカメちゃんと同じ色彩の、くだけた感じの美青年が手を振った。

「お久しぶりです、カツオくん。この間は、お花をありがとうございました」
「女の子への礼儀だから～」

きらきらしい笑顔で、銀髪の青年が手をひらひらとしてみせる。ちょっとチャラい感じが魅力的と言うか、まばゆいと言うか。
あ、いかん。本気で涙が出てきた。もう、キラキラがハレーション起こしそうだよ、美形集団。ああ。それなのに。それなのに。

某イソノさん一家の名前なんだよ、全員！

「話には聞いていたが、こうして直に見てみると、トオコは可愛らしいなあ。自分をしっかり持っているし」

微笑む波平さんこと、ナムール・イーフ・エイデスさん。自己紹介の時には、『波平です』としか聞こえなかった。

「あれこれと着飾らせ、可愛がりたくなるのう。どうじゃ？　わらわの城に来ぬかえ？」

色気満載の微笑みを向けてくる、フネさんことフニーエ・スァンデスさん。彼女の名前はあたしには、『フネさんです』としか聞こえない。

「ふむ。だが、異世界人の変わった所はなあ」
「別に良いじゃない、それぐらい。チャームポイントだと思えば」

どうやら双子だったらしい、『ワカメちゃんです』ことワールカ・メイチー・イアンデスさんと、『カツオくん』こと、カイチ・ウー・ウォークンさん。

「祖父殿は、何かと良く笑い出す癖を持っていたではないか。異世

界の者には、異世界の者の事情があろう。のう、シュウゴ？」

そこにサザエさんこと、サジャー・エイデス前魔王陛下が言う。唯一、あたしと同じ感覚を共有できるだろう日本人にして元勇者、今はサザエさんの婿という立場になった浜野さんは、ひっそりと気配を消すようにして立っていたのだが。この言葉に苦笑いを浮かべた。

「サザエ……ああ～……まあ、そうですね……」
「そんな所もかわゆく思っておるぞ、シュウゴ」
「さ、サザエ……」

浜野さんは、真っ赤になった。よっ、ご両人。ラブラブですね、リアルマスオさん。

「それにしても、笑い出すおじいさんっって……」
「吾には曽祖父に当たるな。四代前の魔王、アイムー・ミヌー・イーマ・ウーシュの婿になった勇者だ」

あたしがつぶやくと、その言葉を聞きつけたタラちゃんが言った。浜野さんが、「ミニーマウスと結婚した人」と解説してくれる。ああ。例の英語圏の人か。

「魔王と結婚する勇者、多いんだ……？」
「うん、まあ。なぜかそうなる確率が高いみたいだよ。だから、透

子ちゃんも安心してね」
「え？　何を」
「またまた。わかってるからね？」

いや、何を。

浜野さんからの謎の言葉に首をかしげつつ、あたしは改めて、周囲を見渡した。
魔王城のサンルーム。光が差し込む、美しい部屋。のどかで平和な場所。
そこにいる美形集団。まぎれこんだあたしは、すごく居心地悪いです。どっちをむいても美形。どこを見てもキラキラ。

「浜野さん……、そばにいて良いですか！」
「え、なに急に」
「浜野さんの顔が、今のあたしには安息の地なんです！」

美形集団にストレスを感じて、あたしは浜野さんの側に寄ろうとした。ビバ、普通顔。ビバ、のっぺりな日本人顔！
と、思っていたら、後ろから襟首をつかまれ、ぐいっと引っ張られた。

「うひゃわ！」

バランスを崩して転びそうになったが、ぽすっと誰かの胸に抱きかかえられ、免れる。……って、誰かの胸？

「おや」
「まあ」
「ほう」
「ひゅーひゅー」

周囲から上がる声。見上げたあたしの目に、不機嫌な顔のタラちゃん。え？　何がどうなった。

「え、ちょっとタラちゃん。なんで引っ張ったり」
「トオコは」

もがいて腕から抜け出そうとしたが、タラちゃんは許さず、さらに力をこめてきた。ぐえ。

「吾より父上が良いのか」
「はあ？　何の話……」
「父上は、母上のものぞ。トオコが想ったところでどうにもならぬ」
「いや、だから、何の話」

あわあわしていると、「これ、女子（おなご）に対して乱暴じゃぞ、タラチ。トオコに怪我をさせる気か？」とサザエさんが言った。タラちゃん

は、不満そうな顔をしたが、腕の力をゆるめた。あたしはあわてて、タラちゃんの腕から抜け出して、距離をとった。
　すると、ずん、と空気が重くなった。ちょっと冷や汗が出た。何だかよくわからないけど、タラちゃんの不機嫌さに拍車がかかっている。

「ははは。若いなあ、タラチ」
「女の子は、優しく扱わないとダメよ」
「やっぱり良いなあ、タラチ。魔水晶の鉱山一つあげるから、交代してくれない？」

　周囲から、上がる声。わけわからん。特に最後の、イクラちゃんの発言は、なんなのだ。

「断る」

　タラちゃんは、威嚇するような勢いでイクラちゃんに言うと、またあたしの腕をつかんで引っ張り、抱きついてきた。ちょっと！　お姉さんに甘えたい子どもですか、君は！　十五歳なのは知っているけど、見かけは完全に成人男性なんですよ、異世界事情か何だか知らんけど！
　うお、なつくな！　なでるな！　匂いをかぐな！　ヤメテヤメテ～、お姉さんのライフはゼロよ！

「おお、仲が良いのう」

がっしり抱き込まれ、ふんふん匂いをかがれ、ぐりぐり頭をこすりつけられたあたしがじたばたしていると、微笑ましげに言われた。眺めてないで止めてください、サザエさん！

「本当だね。相性もよさそうだし。一族の主だったものも、好意的だしね。良かったね、透子ちゃん」

にこにこしながら、浜野さんが言った。何が。何が良かったんですか！

すると、浜野さんは、爆弾発言をしてくれた。

「だって、君はタラチのお嫁さんになるんでしょ？　集まったみんなに認めてもらえて良かったねえ」

その瞬間。

あたしの中で、全てが止まった。世界も。思考も。何もかも。

ただ、浜野さんの言葉だけが。

繰り返し、あたしの中で響いていた。

タラチのお嫁さん。

タラチのお嫁さん。

タラチのお嫁さん。

「……タラちゃんの、お嫁さんんんん〜〜〜〜っ！？」

そうして次の瞬間、動き出した世界の中、愕然として叫ぶあたしがいた……なんでやねん！

集まりました。（後書き）

まさかのラブコメ展開。

話しました。前編。

「それで、どーしてこうなっちゃったのか、説明してほしいんですけど」

ジト目であたしが言うと、浜野さんが苦笑いをした。

「いや〜、まあ……ねえ？」
「誤魔化されませんから。そんな顔されても」
「や、誤魔化す気はないんだけど……うちの子が申し訳ない。てっきり手順は踏んでるものと……え〜」
「手順も何も、あの日初めて聞かされましたよ、あたしがタラちゃんの花嫁候補だなんて！」

魔王城の庭。のどかに小鳥がさえずり、美しい花々が楽しめる東屋で、あたしと浜野さんは向き合っていた。
後ろからあたしをがっしり抱き込んで離さない、タラちゃん込みで。

「何とかしてくださいよ、これ！　なんなんですか。ついて回られるし、抱きつかれるし、匂いかがれるし、舐め回されるし、変態にもほどがあるって、だから舐めるな〜〜〜〜！」

べろりと首筋をなめてきたタラちゃんを、ばこっと殴る。しかし

タラちゃんはあきらめない。ぎゅうぎゅう腕の力を強めてくる。

「ぐえ、痛い痛い、痛いって！」

「離しなさい、タラチ！　彼女を殺す気ですか！」

あたしの様子に慌てた浜野さんが言い、手を伸ばしてべしっと角を叩いた。ぐう、と妙な声がして、腕の力が弱まる。

「ああ、透子ちゃん、魔族の弱点、角だから。絶対的な弱点ってわけじゃないけど、びっくりさせるぐらいはできるからね？　ほら、タラチ、離しなさい！　女性への礼儀はどこへ行った？」

恨めしげに浜野さんを見ていたタラちゃんは、しぶしぶとした感じで、あたしから腕を離した。

その代わり、体をくっつけてきたけど。東屋の椅子が、なんかぎゅうぎゅうな状態に。

「犬か」

「似たようなものだね」

思わすこぼしたあたしの言葉に、浜野さんがうなずいた。

「サザエの母方の祖先に、炎狼がいたそうだから。タラチにもその

形質が出てるらしいよ。目が赤いでしょ」
「へえ、そう……って、ワンコ入ってるの、タラちゃん！？」

だからか。だから、匂いかがれたりしたのか。

「でもなんで、こんなにくっついて……ちょっと、タラちゃん！説明してもらえない？　どうしてあたしが、あんたの嫁候補なのよ！」

するとタラちゃんは、傷ついたような顔をした後、驚愕の言葉を放った。

「最初に申し込んできたのは、トオコの方ではないか」

なんですと？

「あたしが、いつ」
「初めて出会った時だ。そなたは吾に、婚姻の申し入れをしてきた」

なんですと！？

「魔族の王たる吾に対し、一歩も引かず。堂々たる申し入れであっ

た」

……。

「なんですと～～～～っ！！？？？」

話しました。中編。

「待て。ちょっと待て」

あたし、混乱中。何がどうして、どうなった。

「あたしが、あんたに、けっこんの、もうしこみ、したって？」
「驚いたが、その気概は好ましいと思った」

タラちゃんは、ほんのりと頬を染めた。うをを、超絶美形がデレてる！　目の保養！　いや、そうじゃなく！

「うおおおおあたし何言った〜〜！」
「透子ちゃん、落ち着いて」

浜野さんが、声をかけてくる。あたしは椅子から立ち上がると、浜野さんに駆け寄った。胸ぐらをつかんで叫ぶ。

「アレですか！　異世界事情！　なんか変な習慣が結婚の申し込みになっちゃうとか、うっかり言った何かがたまたま、プロポーズの言葉になっちゃってたとかっ！」

某アニメみたいに、平手打ちがプロポーズとか。
そう思っていたら、浜野さんがタラちゃんに声をかけた。

「いや、だから、落ち着いて……タラチ？　彼女は何をしたんだい。アンゲゲラ族の裸踊りとか、メルフォゲスラ族の魅惑の這いずりとか、したのかい？」

なにそれ。微妙に詳細が知りたいぞ。

「父上……いや。トオコは別に、狂乱の裸体をさらしたわけでも、色香を放つ這いずりをしたわけでもありません」

やってないよ！　何を狂乱したり、イモムシやったりするんだよ！　ってか、色気あるの？　這いずるのに？

「吾も父上から、異界の風習は聞き知っております。トオコはまさに、その風習に則って吾に求婚しました」
「いやだから、あたし、そんな事した覚えないって！　異界の風習ってナニ？　何がどうしてプロポーズになったわけ？」

思わずそう言うと、タラちゃんは言った。

「トオコは吾に剣を突きつけてきた」

「いやそりゃ、戦うつもりだったしね」
「そうして、言った。『結婚を前提としたお付き合いをしてほしい』と」
「はい？」

あたしは硬直した。

「言ったの？」

浜野さんの言葉に首を振る。なぜに、そんな言葉を言ったと誤解されているのだか。
するとタラちゃんは、顔を歪めた。

「トオコははっきりと、吾に向かって言ったではないか。あの時の自分の言葉を、良く思い出してみるが良い」
「え？」

あたしは眉間にシワを寄せると、タラちゃんとの出会いを脳裏に再生しようとした。

～回想中。

『死にたくないから、ここまで来たわ』

魔王は、あたしを見つめ、ふうと息をついた。

『まこと、愚かしい行いを繰り返すな、人の国の王とその取り巻きは。

哀れとは思うが、勇者よ。吾も殺されてやるわけにはゆかぬ』

『そうだろうね。あたしもこんな理由で殺しに来る人がいたら、全力で嫌がるし。でも、死にたくないからさ』

剣を構える。

『だから付き合ってよ、悪いけど。礼儀らしいから、名乗るわね。あたしは透子（とおこ）。神山透子（かみやま とおこ）。食べ歩きが好きな、ただの女子高生……だった』

『礼にのっとり、吾も名乗ろう。

北の荒野、魔の一族を統べる王、タラチ・イアンデス・グロウガリアス』

〜回想終了。

「やっぱ、結婚してくれなんて言った覚えないけど……」

首をひねると、タラちゃんが、むう、という唸り声を上げた。

「トオコにとって吾は、さほどに小さき存在か。あれほど情熱的に申し込んでおいて、それを忘れるとは……」
「え、いや、タラちゃんには感謝してるよ！？　すごいありがたかったよ！　今も仕事もらってるし、もう足向けて眠れませんってぐらい恩人だよ！」

慌ててあたしは言った。

「でもあたし、そんな事言ったっけ……？」

タラちゃんは、不機嫌そうな顔になった。

「では、教えてやろう。トオコは吾の所に来て、『おまえが魔王か』とまず、問うた」
「ああ、うん」

あたしはうなずいた。確か、そんな感じだった。

「『そなたがこたびの勇者か』と尋ねた吾に、そなたは諾と答え、旅路での苦労と、呪いの首輪をつけられた事を語った」
「うん。確かそうだった」

タラちゃんは、続けた。

「そうして吾に剣を向け」
「うん」
「結婚しろと言った」
「いやそこ、おかしいから！」

あたしは叫ぶと、必死になって記憶を探った。あの時、あたしはなんて言った？

「えーと、だから！　確か、首輪があるからって言って、死にたくないから、ここまで来たって言った、けど」
「うむ」
「で、名乗って」
「いや、その前だ」
「その前？」

～再び回想中。

『死にたくないから、ここまで来たわ』
『まこと、愚かしい行いを繰り返すな、人の国の王とその取り巻きは。
哀れとは思うが、勇者よ。吾も殺されてやるわけにはゆかぬ』
『そうだろうね。あたしもこんな理由で殺しに来る人がいたら、全

力で嫌がるし。でも、死にたくないからさ』

『だから付き合ってよ、悪いけど』（↑）

〜回想終了。

え。
え。
え。

「まさか……あれ？」
「思い出したか」
「いやだって……なんであれでプロポーズの言葉になるのよ！　あれって単に、今から殺し合いになりますけど、すいませんって意味の言葉じゃない！」
「えーと、実際にはなんて言ったの、透子ちゃん」

黙ってやりとりを見ていた浜野さんが、そこで尋ねてくる。

「だから、こう、剣を向けてですね？　召喚された事と、呪いの首輪の話をしてですね？　どうしても戦わないとって説明して、『悪いけど、付き合ってよ』って」

すると、タラちゃんが言った。

「あれは、異界の正式な婚姻申込みではないか。父上が教えてくださった通りの作法であったぞ」

沈黙が落ちた。

「息子になに教えてんだ、浜野さん～～～～っ！！！」

話しました。中編。（後書き）

長い伏線だった……。

話しました。後編。

「あのね。言っとくけど、あんたが聞いた異世界の風習は、かーなーり偏ってるから」
「そうか？」

あたしが言うと、タラちゃんは、こてりと首をかしげた。ぐっ。なんか可愛いじゃないか。

「そうよ。ってか、どんな話を教わってたのよ、タラちゃん」
「うむ。吾は、異界の物語を聞いて育ったのだ。父上は吾が幼きころ、様々な物語をして下さったからな。子ども心にも素晴らしかったぞ。」

タラちゃんは、満面の笑みを浮かべた。

「巨大な金属の、二足歩行をする魔物を操る少年の物語には、胸が踊った。少年の、『赤い彗星』と呼ばれた勇者との一騎打ちは、素晴らしかった……」

ガンダムかい。

「親をなくした少女が、気難しい祖父と山で暮らし、人々の心をほ

ぐしてゆく物語は、切なくもあった。引き取られた家で、足の不自由な娘をはげまし、ついにはその娘が癒され、立ち上がったと聞いた時の感動は、忘がたい」

ハイジかい。

「敵対し合う者同士が、ひとつの珠を取り合い、守り合い、そうして絆を深めてゆく物語は、友情の美しさを吾に教えてくれた。球を取り合うだけの競技に何の意味があるのか、正直わからなかったが。しかし『ばすけ』は、わが領土で現在、人気のあるゲームとなっている。吾は、ルカワが好きでな」

スラムダンクかい。

「あんた、ホントに、息子になに教えてんの」
「いや、タラチが楽しそうに聞くもんだから、色々と……、日本のアニメは最高なんだよ?」

ぼそぼそと言い合う、あたしと浜野さん。
タラちゃんは続けた。

「しかし何より、異界の少女たちの健気さに吾は、憧れた……恋にかける情熱、とまどい、そうして切なさを抱えつつ、それら全てを糧として、自らを成長させてゆく貪欲さ。全てを巻き込み、破壊し

つくそうとも、己が情熱を追求し、突き進む信念と勇気。
『キャンディ・キャンディ』と『ガラスの仮面』は、吾の心の聖域とも言えよう」

「あれって、そういう話でしたか」
「いや、異世界ナイズしたら、そんな事に」

どんな話を聞かせたんだ、浜野さん。

「愛した男を失い、治癒の魔術を学ぶと決めたキャンディが、戦を続ける国王に反乱を起こし、仮面をつけて成敗する場面では、涙が出た。
千の仮面を持つ怪盗、マヤが恋しい皇太子マスミとの恋に敗れ、しかし皇太子の幸福を願い、クレ・ナーイ・テンニョの大魔法を使った時には、二人を幸せにしてやってくれと言って父上を困らせたものだ」

「キャンディは看護婦で、マヤは女優じゃなかったっけ」
「いや、異世界で常識違うからね？」

それはもはや、別の物語です。

「そういうわけで、吾は、異界の風習や事情に詳しい」
「いや、それで詳しいと言われても」

思わずツッコミを入れてしまった。だがタラちゃんは聞いちゃいねえ。

「トオコが吾に剣を向け、例の言葉を言った時にすぐにわかった」
「なにがですか」

嫌な予感を覚えつつ尋ねたあたしに、タラちゃんは言った。

「これこそ、『ヤン・キー』と『セイト・カイチョー』の恋物語！
力でもって愛しい男に自分と結婚しろと迫る、実は純情な『ヤン・キー』少女の、切なくも血沸き肉踊る、青春と恋のツンデレ物語のクライマックス・シーンにそっくりであった！
トオコの婚姻の申し入れ、吾はしかと受け取ったぞ」
「あたしはヤンキーで、ツンデレかいっ！　しかもあんたさりげなく、自分を優等生ポジションに置いたなあっ！
大体、どこの少女マンガだよ、そんなベタベタ……」

そこで、微妙な顔をしている浜野さんに気づいた。

「浜野さん？」
「ベタベタ……かなあ」
「え？　や、ひねりがなさすぎるでしょ、陳腐だし。設定」
「そう、だよねえ。うん。俺、やっぱ才能なかったんだなあ」

才能？

「俺、少女漫画好きでさ……某雑誌に投稿してたんだけど。その時、唯一、二次まで通過した作品だったんだ……」

しょぼーんとしたふうに言われた。がっくり肩落とされて。

「ああ～……え～……な、なんか、すみません」

「良いよ。所詮は二次通過作品……それ以上はどうしても、行けなかったんだ」

「は、はあ」

「タイトルは『キラリ☆お嬢さんヤンキー、恋のドキドキ混戦模様』で」

「きらりおじょうさんヤンキー……」

タイトル痛いよ。なんか痛いよ。

「主人公の舞闇蝶子（まいやみちょうこ）は、歩いた後には流血の荒野が広がると言われた、鬼神のごとき強さを誇るレディースの総長で」

「それのどこが『キラリ』で『お嬢さん』なんですか」

流血の荒野って所でもう、可愛らしさとか、さわやかさから遠ざかってるんですけど。

「うむ。荒ぶる男どもを細腕一本で下し、並ぶものなしとうたわれたチョーコの恋した男は、セイト・カイチョーという男だったのだ」

そこでタラちゃんが口をはさんだ。目がキラキラしている。

「彼は実は、小国の王子であった。王位継承の揉め事から、市井（しせい）に身を隠していたのだ。しかし、彼に身の危険が迫る。弟に王位を継がせようとする、継母の陰謀が！

愛しい男の命を守ろうと、正体を隠して側にいたチョーコだったが、朋友を人質に取られ。恋した男の前で正体をさらさざるを得なくなった」

「生徒会長が王子なの！？　それでまた、ベタ展開！？」

なんだその無茶設定！

「囚われの身の王子を助けに、群がる悪党をなぎ倒し、なぎ倒し、ついに満身創痍で王子の前に立ち、『逃げて』と言って倒れたチョーコの切ない純情に吾は……泣いた。

そんなチョーコに、『君の心こそが何よりも美しい』と言ったセイト・カイチョー……二人の恋を阻む者にこそ、呪いあれ。この吾、魔王たるタラチ・イアンデスの怒りの雷を受けるが良い！」

「語ってるし！？」

「タラチは昔からこの話が好きで、何度もせがまれたからね～」

照れるね、とか言いながら、浜野さんが頬を染めている。

「そう、吾の初恋は、まさにチョーコ。強く、激しく、純情可憐な異界の女傑。

チョーコに代わる女性など、いないと思っていた……しかし、そうではなかった。

あの時、吾の前に立ち、剣を手にしたトオコを見て、吾は。戦慄した。父上の語るお嬢さん『ヤン・キー』、闇を舞う正義の蝶、荘厳たる雷電のごとき、そのたたずまい」

「なに、その中二病みたいな二つ名」

「そしてあの言葉……物語のクライマックスで、隣国の王女との婚約式に乗り込んだチョーコは、集まった人々の前、王子に剣を突きつけて言うのだ。

『荘厳たる雷電、参上！』」

ぐは！

参上ってなんだ、参上って！　荘厳たる雷電って、自分で言うか、その恥ずかしい名前を人前で！

「『付き合ってもらうよ、セイト・カイチョー。あたしのものになりな。答はイエスしか認めない』」

しかも言った！　ベタベタな『卒業』ばりなセリフ言った！　うわあああ、めちゃ恥ずかしい、言ったのはあたしじゃないんだけど！

「そうして王子は、チョーコにさらわれ」
「さらわれるのが王子の方か～い！」

もう、ツッコミ入れるのも疲れてきた。浜野さんを見ると、「自分の作った話が語られるのって、なんか恥ずかしいねえ」とか言いつつ、照れている。
照れている場合か！　と言いたかったが、その前にタラちゃんが言葉を続けた。

「トオコが吾に言った言葉とまったく同じ！　ゆえに、吾は悟ったのだ。
これは婚姻の申し入れであると！」
「そこにつながるのか～～～いっっっ！！！！！」

力の限り叫んでから、息を切らせてぜいぜい言ってるあつぃに、タラちゃんは言った。

「かほどに情熱的な申し入れを、どうして断れようか。トオコ。吾はいつでも、トオコにさらわれる所存であるぞ！」

「その認識は違う！　間違いだから！　浜野さん、何とか言って……浜野さん？」

振り向いたあたしが見たものは。

真っ赤になって照れまくる、物語の作者たる浜野さんだった。

「や～、もう、タラチは良く覚えてるよねえ、自分の作った話がこうも、感情こめて語られると、感無量……」

「さっさと誤解解きなさいよ、あんたがタラちゃんに教え込んだんでしょうが、間違った異世界事情～～～～～っ！」

浜野さんにつかみかかり叫ぶあたしは、物語中の『荘厳たる雷電』、『正義の闇蝶』、舞闇蝶子そのものであったと、後にタラちゃんは語ったらしい。

話しました。後編。（後書き）

ヒャダインの『カカカタ☆カタオモイ』と、『じょーじょーゆーじょー』を、ユーチューブで見た後に書いたら、こうなった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1044ba/

勇者と魔王SS～活動報告小話集２～

2012年1月10日22時46分発行